国際人入門

――ホームステイ研修を一手段として――

中　原　功一朗

Ⅰ　はじめに

本学においては，第１回海外ホームステイ研修が予定されている。実施場所はアメリカ・カリフォルニア州，期間は1989年８月20日より９月11日までである。この研修は，国際人養成の一助として，学生に異文化体験の機会を与えることを主な目的としている。

筆者は，広島 YMCA 在職中の1984年から1988年まで，国際交流事業に携わり，海外ホームステイ研修には６回同行した。研修参加者のレポートを読んでみると，ホームステイ研修は国際人養成の一手段として有益であると結論づけることができる。

本稿においては，１）一般市民の国際化が必要とされる背景，２）国際人の定義，３）ホームステイ研修の教育的効果，について述べる。項目３）については，広島 YMCA のホームステイ研修を例にあげる。

Ⅱ　一般市民の国際化が必要とされる背景

１．国際化第３の波

いま，私たちの国際化のときです。これまでは国際化といえば，外国に出ていく選ばれたひとたちのものでした。これからは，国内にいるひとたちも国際化していかねばなりません。……日本のなか

で日常に国際化がすすんでいるのが，目に立ちます。……事実の世界では，急速に国際化がすすんでいますが，私たちの心は，それに追いついていっていないようです。……初瀬龍平[1)]

日本は，黒船の来航に始まる第1の波，第2次大戦後の第2の波をかぶり，現在，国際化第3の波に洗われている[2)]。第1，第2の波は一般市民に大きな影響を及ぼさなかったが，第3の波は一般市民の一人一人にまで押し寄せつつある。以下に，こうした現実を具体的に考察する。

2．海外渡航者数

1964年までは業務以外の海外旅行は認められていなかったが，同年，持ち出し外貨500ドルまで，年1回という規制つきで海外への観光旅行が認められた[3)]。同年から1980年までの日本人海外旅行者数の推移は図1に示す。1986年の海外旅行者総数は5,516,193人[4)]。総数に対する観光旅行者の割合は，1965年31.5%[5)]，1986年81.7%であった[6)]。

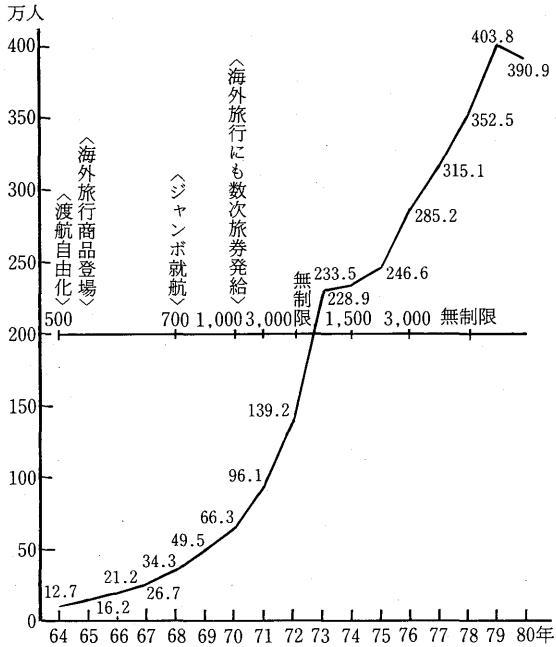
上記の状況，数字が示すとおり，現在ではごく限られた小数の人だけでなく，数多くの一般の人も，以前とは比較にならないくらい自由に海外に出て行っている。日本の経済状況を考えると，この傾向は今後も続くであろう。

3．国内の外国人

訪日外国人数は，1964年 約35万人，1986年 約201万人[7)]。在留資格を持つ

注1）初瀬龍平編『内なる国際化』三嶺書房，1985年11月，「はじめに」より抜粋。
2）馬場伸也「『人類益』の促進を市民の手で」，初瀬龍平編『内なる国際化』三嶺書房，1985年11月，159ページ。
3）稲垣勉『観光産業の知識』日本経済新聞社，1981年，46〜47ページ。
4）法務省資料。1987年版観光白書，60ページ。
5）稲垣勉，前掲書，46ページ。
6）法務省資料。前掲白書，61ページ。
7）法務省資料に基づく運輸省統計。同上白書，60ページ。

図1　日本人海外旅行者数の推移



出所：稲垣勉『観光産業の知識』日本経済新聞社，1981年，47ページ。

一般外国人数は，1952年31,157人，1980年141,256人[8]。日本の経済成長に伴い，外国人労働者，研修生，留学生数は増加し，こうした現実はマスコミでとりあげられている。海外からの花嫁についても，しばしば報じられている。

外国人就労者については，特殊な知識，技術を持つ人よりも，日本語学校に通いながら一般的な仕事をしている人や不法就労者についての報道が多い。興業ビザで働いている人を含めて，こうした就労者については難しい問題もある[9]が，将来，規制が和らげられれば，一般的労働に従事する外国人

8）芹田健太郎「内のなかの異邦人」，初瀬龍平編『内なる国際化』三嶺書房，1985年11月，77〜78ページ。

9）観光や一時上陸で入国し国内で働いているケース，日本語学校に籍を置きながら，ほとんど出席せず働いているケースなど，さまざまなものが報じられている。

（次頁脚注へ続く）

数はこれまで以上の勢いで増加するであろう。また，海外からの花嫁については，アジアの国から農村へ嫁いで来るケースが多数報道されている。

上記の状況から，観光業，対外貿易などの限られた職種に従事している人だけでなく，あらゆる職場で外国人と一緒に働く可能性があり，都市部在住者も農村在住者も外国人と接する機会が増えていることがわかる。

4．海外帰国子女

外務省統計では，1983年の海外在留邦人数は約22.4万人[10]，1984年の海外在留義務教育相当年齢者は36,223人，高校生や幼稚園児を加えると5万人を越えると推定される[11]。

海外帰国子女は外国人ではないが，異なる文化的背景を背負っている。帰国子女数は，1971年，小学生から高校生までで，1,543人，1986年では約7倍の10,507人にのぼる[12]。帰国子女数の推移は図2に示す。1971年から1986年までの累計は10万人を越える[13]。

以上の数字から，児童，生徒はもとより，周囲の大人も，海外帰国子女と接する可能性が急激に高くなったことは明らかである。今後も，多くの児童，生徒が帰国するであろう。

5．一人一人の国際化

栗本は，「日本の国際化は，一定数の対外要員の養成のみで達成できるこ

法務省入国管理局の発表した「上陸拒否者，入管法違反事件の概況」によると，入管法違反のうち，資格外活動と資格外活動絡みの不法残留を合わせた不法就労者は，1988年，14,314人摘発された。この数字は，1983年の約6倍である。（1989年3月27日，中国新聞日刊。）

10）佐藤幸男，仁平則子「帰国子女は異星人なのか」，初瀬龍平編『内なる国際化』三嶺書房，1985年11月，140ページ。

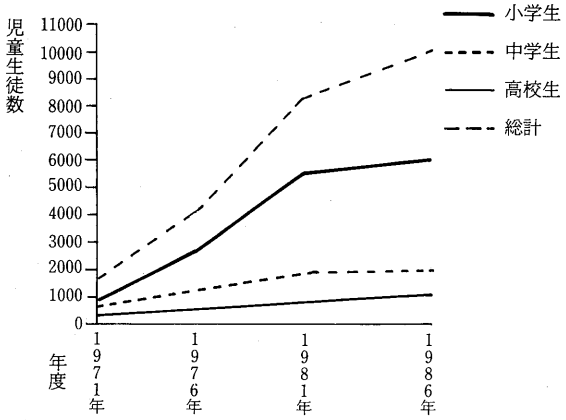
1989年現在，海外在留邦人数は，約27万人。（1989年3月3日，毎日新聞日刊。）

11）同上論文，141ページ。

12）「帰国子女たちとその教育　たった15年で7倍に!!」，『別冊 The English Journal』（アルク）第39号，1988年2月，30ページ。

13）同上記事，同ページ。

図2　帰国子女数の推移



出所：「帰国子女たちとその教育　たった15年で7倍に!!」，『別冊 The English Journal』（アルク）第39号，1988年2月，30ページ。

とではなく，日本人の生活システムの中に国際的な共通項を増やしてゆくことによってのみ可能だと私は考えます[14]。」と述べている。この記述の正当性は，前述の状況，数字から明らかである。つまり，一人一人の国際化が必要なのである。日本人全員が外交官になるわけではないが，諸外国の人と仲良くするための心の準備は一人一人に必要である[15]。

国際感覚の欠如から，旅行先の国の文化や人の心を踏みにじり，現地の人に反日感情を与える。国内では，不条理な差別により在日外国人の心を傷つけ，強い反日感情を抱かせる。このような事態が起こるかぎり，草の根レベルの平和思想は根づかない。

個性より同一性が尊重され，異なるものは排除するという集団意識が日本の社会では優先するので，「どこか違う」という理由で，帰国子女いじめが起こる[16]。帰国子女は，いじめられないように，必要以上に周囲に同化しよ

14）栗本一男『国際化時代と日本人』NHK ブックス，1985年，16ページ。
15）会田雄次『日本人の生き方』講談社，1976年，22〜23ページ。
16）佐藤幸男，仁平則子，前掲論文，144ページ。

うとする。英語をわざとカタカナ読みしているという話[17]はいかにも悲しい。保育園児の場合，仲間に入るには英語はじゃまであり，早く忘れたかったのではないかと思われる例もある[18]。

佐藤，仁平は，「日本が『国際化』して行く第一歩が帰ってきた存在の『帰国子女』であり，彼らが身につけてきた外国文化をいかに再び日本のなかにフィードバックできる社会環境をいかに作り出すかがいま重要なのである[19]。」と述べている。しかし，前述のような現実が続くかぎり，帰国子女ならではのよさを発揮できないし，周囲も帰国子女をとおして異文化の横顔を見る機会を失うことになる。

Ⅲ　国際人の定義

1．国際人

国際人とは何であろうか。国際人養成を論じるにあたり，その定義について検討する。栗本は，下記４つの定義例をあげ，見解を述べている。

定義例　1

「国際人とは，外国人の間に自然に交わっていて，しかも日本人たることを忘れない人物」と定義する。この定義の中で重要なことは，自然にということと日本人という点であることはいうまでもない。すなわち外国人と交わることに違和感をもったり，外国人に心酔してしまって日本人だか外国人だか分からなくなってしまうようなものは，国際人というに値しないということだ。

斎藤鎮男「文部省中等教育資料」1982年８月号

定義例　2

17）初瀬龍平，前掲「はじめに」，ii ページ。
18）川辺純子「国際化と再適応」，『THE WAVE』（広島 YMCA ビジネス専門学校，総合開発研究所）第33号，1987年10月，10ページ。
19）佐藤幸男，仁平則子，前掲論文，151ページ。

……われわれと西洋人の間には，同質なものと異質なものがあります。彼らにも理解できるものがあります。しかし，すべてを同質にすることは完全に不可能です。異質を異質として，われわれは自覚し，相手に理解させることを「国際化」といい，そのような人物を「国際人」といいます。国籍不明の国際人はいません。

山室英男「序　国際社会と日本人――その原初的体験から」NHK編『日本の条件』1　30ページ，日本放送出版協会，1983年

定義例　3

国際人を一般的に定義づけするとすれば，「日本人と外国人のものの考え方の違いがわかり，互いに相手の立場を理解し合うことによって意見の一致と不一致を整理し，それをどう処理するか話し合いできめることのできる人物」ということになろう。

真の国際人とは他国に比べて日本の良いところ，悪いところを適正なバランス感覚で判断できる人と言ってもよい。

山内大介「多極化時代の国際感覚」山崎宗次編『国際派主流宣言』5，7ページ，日本リクルートセンター出版部，1982年

定義例　4

日本生存の具体的イメージは，たとえば良質の日本人が数多く世界の各地に散らばり，おのおのの額に汗し油にまみれて働いて，それぞれの国に貢献する。そしてこのことを通じて，日本が国際社会で好意をもたれ，信頼をかち取る――というようなことだろう。しかし，東京にすら職場を求めようとしない若者がはたして外国に――アジアやアフリカの奥地はおろかニューヨークやパリにさえ，職場を求めようとするであろうか。

飯田経夫『「豊かさ」とは何か』講談社現代新書，124ページ，1980年[20)]

20）栗本一男，前掲書，12～13，15ページ。

栗本によると，定義例１，２，３は，日本の国や文化，企業などの利益を代表して対外折衝にあたる人の好ましいイメージであり，日本と外国のシステムの接点で仕事をしている人を想定したものである[21]。定義例４は，外国のシステムの中に飛び込んで行き，そこで生活しようとする人のイメージである[22]。

２．国際人の基本的資質

自国やその文化，企業の利益を背負って外国人と交渉したり，海外に職を求めたり，永住するものや，ジョン・マンジロウ[23]のように日米両国の架け橋となって多大な貢献をする人は，ごく少数である。一般市民の全員が，そのようなことができるわけではなく，する必要もない。一人一人のレベルで

資料１

中浜万次郎　なかはままんじろう（1827－1898）

幕末明治期の英学者。別名ジョン万次郎。土佐国中浜村（高知県土佐清水市）の漁夫の家に生まれる。1841年（天保12），出漁中遭難漂流し無人島（鳥島）に漂着し，アメリカの捕鯨船ホーラント号に救助され，同国に渡り教育を受けた。1850年（嘉永３）ボイド号でホノルルから帰国の途につき，翌年８月鹿児島に上陸，長崎で取調べを受けたのち故郷に帰された。1852年12月藩庁に召され，徒士格に登用されて藩士に列し，1853年幕府に招聘されて普請役格に列し韮山代官江川英龍の手付を命じられた。ペリー来航時には重用され，外国使臣の書翰の翻訳や軍艦操練所教授，鯨漁御用を勤め，1860年（万延１）新見正興の遣米使節には通弁主務として随行した。1861年（文久１）小笠原島の調査，1864年（元治１）薩摩藩に聘せられ軍艦操練・英語教授を委任された。1868年（明治１）土佐藩に召され，翌年徴士として開成学校２等教授として英学を教授した。1870年，プロイセン・フランス戦争観戦のため品川弥二郎，大山巌らとともに渡欧を命ぜられたが，翌年病を得て帰国した。以後悠々自適の生活を送った。　<加藤栄一>

●中浜明著『中浜万次郎の生涯』（1970・冨山房）

出所：日本大百科全書17，小学館，454ページ。

21）同上書，14，16ページ。
22）同上書，16ページ。
23）中浜万次郎（*cf.* 資料１）

は，もっと基本的なことで十分ではないだろうか。以下に，一人一人が備えるべき国際人の基本的資質について論じる。

栗本は，「普通の日本人が，普通の外国人の間で普通に生活するために基本的に必要とされている能力を育ててゆく教育環境・生活環境を準備することが不可欠でしょう[24]。」と述べている。また，日本の国際化とは，「日本が生活文化のシステムの中で，多様な生活スタイルを許容し，多様な生活の価値観を包括すること[25]」と述べている。

馬場は，「国を開くことは，下からの市民の自己解放によらねばならない[26]」ということを示唆し，「『国際化』とは，価値の多様性・相対性を，お互いに認めあうことでもある[27]。」としている。

Masudaは，「国際人は人間に対しては同一性だと信じている。と同時に人間の相違を認識し，その相違を大切にする。」と述べ，これを基本原理としている[28]。

以上まとめてみると，一人一人が備えるべき国際人の基本的資質とは，次のようになる。

1　異なる言語的，文化的背景を持つ人と意思疎通（使用言語は問わない）ができ，理解できる。
2　異なる価値基準を受け入れ，対応し，尊重できる。

教育の現場においては，これらを国際人養成の初歩段階における到達目標とすることが妥当であると思われる。

24）栗本一男，前掲書，16ページ。
25）同上書，17ページ。
26）馬場伸也，前掲論文，160ページ。
27）同上論文，161ページ。
28）Masuda, Robert Y.「国際人とは……」，『THE WAVE』（広島YMCAビジネス専門学校，総合開発研究所）第31号，1987年6月，7ページ。

Ⅳ　ホームステイ研修の教育的効果

1．国際人養成の一手段として

国際人養成の一手段として，ホームステイ研修をあげることができる。ホームステイとは，「2つの家族（ファミリー）を持つこと[29]」，「ある一定期間，外国の見知らぬ家庭に滞在すること[30]」という定義がある。目的は，「1）ホストファミリー[31]と一緒に生活し異文化に接することによって，その国や国民を理解すること。2）ホストファミリーに，日本や日本人を知ってもらい，日本を正しく理解してもらうこと[32]。」と述べられている。

ホームステイが，どのような精神のもとに，どのように始められたかについては，下記のとおりである。

> ホームステイは，そもそも「世界平和を進めるためには世界中の人々が理解し合い，深い友情で結ばれる必要がある」という考えから，1932年アメリカのドナルド・ワット博士の提唱によって，「国際生活体験」（Experiment in International Living）と名づけられ，市民のボランティアから始まった[33]。

この種の研修は，だれにでも，比較的手軽に参加できる。資格については，原則的な年齢制限があるくらいで，常識のある人であればだれでも参加することができる。英語圏では，ホームステイ参加者の受け入れ体制は整っており，受け入れ団体の組織化も進んでいる。日本では，ホームステイ関係の情報は豊富である。参加希望者が国内の旅行社や手配団体に申し込めば，スタ

29）広島 YMCA ビジネス専門学校，ホームステイ研修パンフレット。
30）国際文化教育センター編『ホームステイの手引』明日出版社，1985年，12ページ。
31）受け入れ家庭，その家族。
32）国際文化教育センター編，前掲書，15ページ。
33）同上書，12ページ。

ッフがほとんどのアレンジをし，自分で準備しなければならないことについても指示してくれる。

2．ホームステイ研修の実例

a．専修学校のプログラム

広島YMCAビジネス専門学校では，国際人養成教育の一環[34]として，1985年春より「カリフォルニア・ホームステイとハワイYMCA交流の旅」という海外研修を開始した。その後，1988年春まで，毎年，春と夏に実施し[35]，毎回10名前後の学生が参加した。

参加者は，ほとんどが同校学生で，英語力は，大半が英検2・3級レベルであった。

資料2

YMCA，ホームステイ参加者への注意書き

1985年2月25日

参加者各位

専修学校
広島YMCAビジネス専門学校

異文化を理解し，平和，国際協力を推進させるためにも，他の国の人々との交流が大切な事はいうまでもありません。YMCAでは個人と個人との信頼関係の積み重ねが世界平和を築き上げてゆく上での大きな力となる事を確信し，この海外研修プログラムを企画致しました。今回の参加者が一人でも多くの友人を海外に得，個人的信頼の輪を拡げてゆく事を願っています。今回は当校主催の海外研修プログラムに参加するわけですから，引率の中原先生，現地のゴーインズ先生の指示に従い，当校学生として各自責任ある言動をとるように心がけて下さい。

海外研修プログラム出発日も間近に迫り，直前4日間に英会話，交流プログラムの準備プログラムを組みましたので，積極的に参加して下さい。

なお，研修レポート及び行動記録の提出者については，成績評価表に特記します。くれぐれも健康に留意し，けがなどないよう，充分気をつけて下さい。

以　上

34）*cf.* 資料2。

35）1988年度より，ホームステイ研修は，年1回，春に実施。なお，夏期海外研修参加希望者は，同YMCA外語学院主管のアメリカ・スプリングフィールド大学キャンパスプログラムに参加できる。

内容は，カリフォルニアでの約3週間のホームステイ，3～4日間のハワイ滞在中に行われるホノルルYMCAとの交流，観光であった。ホームステイ期間中の週間スケジュールの一例を資料3に示す。

b．ホームステイの有益性

筆者が同行した広島YMCAビジネス専門学校の6グループの内，3グループ，31人の研修レポートをもとに，ホームステイ研修の教育的効果を考察する。

レポート中に，多くの学生が記述した4項目とその学生数は，次のとおりである。

1　国際人のよいモデル……23人
2　国際人のよいモデルに感動……21人
3　さまざまな違い……31人
4　アメリカでの楽しい生活……28人

項目1，2については，異なる言語的，文化的背景を持つ見ず知らずの日本人学生を家族の一員として迎えてくれたアメリカ人の心の広さ，学生の英語力の不足にもかかわらずコミュニケーションをはかってくれたアメリカ人の辛抱強さ，日本のことについて熱心に質問したり，アメリカのことを教えてくれたアメリカ人についての記述が多かった。また，そうしたアメリカ人に接して嬉しかったとか，自分もそのようになりたいと書いているものもあった。

項目3では，生活様式・制度・考え方などの相違について述べ，大半はその相違に驚きを示した。

項目4については，出発前は不安であったが，アメリカでの生活は楽しくホストファミリーとの別れが辛かったという記述が多かった。

項目1，2の数字が含蓄するところは，一般市民の国際化とはどんなものかを，おぼろげながらもわからせた点である。日本人学生を親切に受け入れ

資料3

YMCA，ホームステイ研修週間スケジュール
（1986年3月1日〜3月7日）

DATE		
Saturday & Sunday 3／1 & 3／2	FREE WEEKEND WITH HOST FAMILY	
Mon. 3／3	9：00−12：00	Class
	1：00−4：00	We will visit the equestrian center and go for an old fashioned hay ride.
Tues. 3／4	9：00−12：00	Class
	1：00−4：00	CULTURAL EXCHANGE at Sacramento State College to participate in activities honoring Native American History Week.
Wed. 3／5	8：00−6：00	FULL DAY EXCURSION to the beautiful city by the bay San Francisco where we will sightsee, shop and enjoy the flavor of this famous city.
Thurs. 3／6	9：00−12：00	Class
	1：00−4：00	This afternoon we will participate in the popular American sport bowling.
Fri. 3／7	9：00−12：00	Class
	1：00−4：00	Free Afternoon

てくれた家族をとおして，参加者はアメリカにおける市民一人一人の国際化を認識したはずである。そして，そうしたアメリカ人の中に，市民レベルにおける国際人のよいモデルを見出したことであろう。

項目3，4の数字からは，さまざまな相違に驚きながらも，アメリカの生活になじみ，楽しんだ参加者のすがたを見ることができる。

日本人を受け入れ，コミュニケーションをはかるアメリカ人，精一杯の英

語を駆使して，アメリカの生活に溶け込もうとする学生。全体的には，この相互努力の構図が見える。参加者は，言語的，文化的障壁は，善意と相互努力で克服でき，信頼関係を作り上げることができることを実感したはずである。

以上の考察から，ホームステイ研修は，Ⅲ－2にあげた「国際人の基本的資質を備える」という目標達成のための有効な手段の1つであると結論づけることができる。

c．データの信頼性

残念ながら，少なくとも2つの理由から，データの信頼性には限界がある。1つは，データの絶対量が少ないことである。もう1つは，前述の項目4で，参加者の大半が「アメリカでの生活は楽しかった」と述べているが，図3に示す久米の異文化対応曲線を考えると，楽しいのも当然といえる。3週間程度の滞在では，参加者はハネムーン期[36]のうちに帰国することになる。

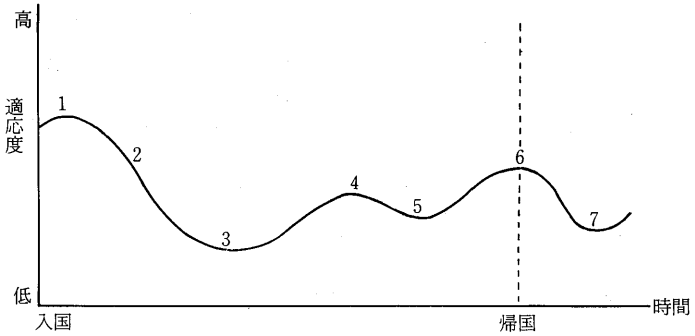
Ⅴ　結びにかえて

国際人の第一歩とは，差別やコンプレックスを捨て，異なるものに対応できる順応性を養うことではないだろうか。外国人と接する機会が増えつつある現在，私たちは，順応性をもって，対等な立場で，諸外国の人とコミュニケーションをする能力を身につけることが必要であろう。

データの信頼性には限界があるが，ホームステイ研修は，専修学校生にとって，国際人養成の初歩段階として有益であったといえる。大学生にとっても，同様の効果が期待できる。双方とも同年代であり，学生という社会的立場であることがその理由としてあげられる。本学においても，ホームステイ研修が定着し，国際化の窓となることを期待すると同時に，これを足掛かり

36）見るもの聞くものすべてが新鮮，周囲の人も親切で満足。（久米昭元「カルチュア・ショックと適応過程」，古田暁監修『異文化コミュニケーション』有斐閣，1987年3月，225ページ。）

図3　異文化適応曲線



出所：久米昭元「カルチュア・ショックと適応過程」，古田暁監修『異文化コミュニケーション』有斐閣，1987年3月，226ページ。

に，その他複数の海外研修プログラムについても可能性を探りたい。

なお，本稿においては，国際人養成の一手段としてアメリカにおける海外ホームステイ研修をとりあげたが，アメリカ化（イクォール）＝国際化ではないということを付記しておきたい。

本研究にあたり，ご協力を賜った広島YMCAビジネス専門学校の梶原副学校長をはじめ同校スタッフに対し，感謝の意を表する。

本稿は，第27回JACET全国大会（1988年9月，四国学院大学）において，“Home-Stay Experience as a First Step to be an International-Minded Person”と題して英語で発表したものに，加筆，修正し，日本語で記述したものである。